

みせて、おしえて、あなたの農業

農の魅力

地域で取り組む 循環型農業

農事組合法人ならやま
組合長 若杉 利行さん
三桑市福山地区 下田支店管内



俺たちの田んぼ

日が暮れてからの移動でも、一面の雪ではのかに明るく感じる下田地区。まだまだ春は遠い土地柄だけど、こだわりの米作りについて農事組合法人ならやまの組合長、若杉さんにお話をうかがいました。

「はじめは集落営農への切り替えを目指していたんですが、8年前に一足飛びで法人化しました。これからは俺の田んぼじゃなくて、俺たちの田んぼなんだと、みんなで意識を新たにしましたね」以前から生産組合として活動していた15軒で法人をスタート。現在は18軒で22haの田んぼを管理しています。

「途中から加わったメンバーには若い人もいて、自分たちの活動が若い世代に興味を持ってもらえて嬉しく思っ



ています」勤め先を退職した二人以外はみんな兼業という構成の方々。収穫は一律で分配し、作業分は時給計算で支給されています。

「大変な仕事でもみんなやると苦労を感じない。機械が田んぼにはまっただとしても誰かいてくれるので、安心してはまれます」と冗談まじりの若杉さん。運営するうえで大切にしているのはコミュニケーションだといいます。「みんなと農業の話ができるのがいいですね。いいときは全員で喜んで壁に当たればいろんな意見交換ができます」特に農作業のあとのお酒の席では、さまざまな発想が生まれてくるそう。

独自の米作り

「機械の稼働率を考えると、コシヒカリのほかに酒米の五百万石、飼料米など、毎年だいたい5品種くらい作っています」安全と美味しさを追求する、その作り方にも特徴が。

「飼料米を作るのに堆肥と尿素、破安を撒いていたんですが、どうせなら安を撒いていたんですが、どうせならと思ってコシヒカリにも堆肥を使っていきます」飼料米を近隣の畜産研究センターへ出荷し、集められた肥料を堆肥センターから仕入れて田んぼに撒く流れ。結果的に運搬コストも抑えられる、地域内循環型農業になりましたと話す



若杉さん。そんな取り組みや作業のようすはホームページで確認できるようにしています。

「まずは知ってもらわないと」フェイスブックに参加したり、ラジコンヘリでの直播きの動画をYouTubeに投稿する以外にも、オリジナルの米袋を作るなど、宣伝の方法も工夫されています。

「農家のみなさんはそれぞれ米作りで自信があると思います。うちでも堆肥を撒いたり手間がかかっている分、気持ちが入っていますよ」なかなか雪が消えない豪雪地。やることも山積みなのに気がもめるね、と雪解けを待ちわびている若杉さんでした。

コミュニケーションをサポートする パソコン



もともと機械好きで、パソコンで作った計画や肥料設計など一覧表を作って配布して、みんながわかりやすいように工夫しています。

一年の作業の様子などをこちらで紹介しています。 <http://www.narayama.biz/>